

ジョナサン・スウィフト『ガリヴァー旅行記』の

“Houyhnhnm”の発音について

—新たな表記「フウイフンム」の提案—

山内 暁彦

序

ジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift) の『ガリヴァー旅行記』(*Gulliver's Travels*) 第4篇「フウイヌム国渡航記」(“A Voyage to the Country of the Houyhnhnms”)に登場する“Houyhnhnm”は、従来の日本語訳においては「フウイヌム」と訳されてきた。この他にも「フーイヌム」「フーインム」「フイヌム」などと表記されてきた。原作によると、“Houyhnhnm”は発音不可能な言葉をあえて英語の文字に当てはめて表記したものとされている。従って、英語では“Houyhnhnm”と記されるこの語は発音が困難であるはずである。この作品を日本語に翻訳するに際しては、“Houyhnhnm”を何らかのカナ表記をすることになる。しかし、日本語に翻訳した途端に、この言葉は簡単に発音することが可能なものに変貌してしまう。日本語訳では、作者スウィフトの元々の意図、すなわち、“Houyhnhnm”という発音の不可能性ないし困難性が、まったく無視された形になってしまう。この問題の背景には、英語と日本語とでは文字や発音の体系が大きく異なるという事情があるのは言うまでもない。英語と日本語の差異を乗り越えて、作者の本来の意図、すなわち、発音もできないような名を持つ「馬」の種族をガリヴァーと対峙させ、人間に対する風刺を遂行するという意図を生かすためには、“Houyhnhnm”の日本語訳も、発音が困難な表記にすべきというのが筆者の考えだ。本論においては、作者スウィフトが風刺作品『ガリヴァー旅行記』に、「馬」の種族とガリヴァーとの遭遇を設定した理由について考察し、発音が困難な“Houyhnhnm”を、どのようにすれば日本語でも上手く表現することができるかについて、私見を述べたい。

まずは、元の英語では“Houyhnhnm”はどのように発音されるべきかについて考えてみよう。「元の英語」という言い方は実は正しくない。というのは、“Houyhnhnm”は、ガリヴァーが未知の島で遭遇した馬が喋る「馬語」であるはずだからだ。だが、『ガリヴァー旅行記』という作品自体は英語で書かれていて、その中では「馬語」の単語“Houyhnhnm”が英字で綴られている。そのような状況を鑑みて、本論では“Houyhnhnm”を便宜的に「英語」の単語と呼ぶことにする。さて、英語で発音する際には、この語を2つの部分 — “Houy” と “hnhnm” — に分けて考えると簡単であろう。最初の部分“Houy”については、英語ならば最初の“H”は読むはずなので、/hu:ɪ/ もしくは /hwɪ/ などと発音するのが無難だろう。問題は後半の“hnhnm”の部分である。字面だけ見ると、声門摩擦音 /h/ と歯茎鼻音 /n/ の2つの子音を重ね、“hn”、“hn”と2回素早く繰り返す、最後は両唇鼻音 /m/ を付け加えれば良いということになる。ただし、最後の2音は種類の違う鼻音(歯茎鼻音 /n/ と両唇鼻音 /m/)が続くので、ことはそう簡単ではない。そもそも、“hnhnm”と5つ連続で子音が続くのは英語では他に例がないだろう。この後半部分こそが、人間には発音が不可能な「馬語」を無理に英字に置き換え、多少なりとも人間によって発音できそうにはしてあるものの、やはり依然として発音が困難な箇所なのである。

ガリヴァーは、はじめて Houyhnhnm たちに出会った直後、彼らの言葉の発音や表記が難しいことを語る。見知らぬ島に漂着して間もなく、ガリヴァーは野蛮で忌まわしい Yahoo どもの攻撃に遭い、たまたま現場を通りがかった2頭の Houyhnhnm に助けられる。Houyhnhnm たちの話す言葉を聞いていたガリヴァーは、“Yahoo”という語が自分を襲った生物を指す言葉であることを知り、助けてくれた馬のような種族が“Houyhnhnm”という名称を持つことも知る。

I could frequently distinguish the Word *Yahoo*, which was repeated by each of them several times . . . I boldly pronounced *Yahoo* in a loud Voice, imitating, at the same time, as near as I could, the Neighing of a Horse; at which they were both visibly surprised, . . . Then the Bay tried me with a second Word, much harder to pronounce; but reducing it to the *English Orthography*, may be spelt thus, *Houyhnhnm*.¹

¹ Jonathan Swift, *Gulliver's Travels*, ed. David Womersley, The Cambridge

それらの馬の双方からしばしば繰り返される“Yahoo”という言葉は私にはしばしば聞き分けることができた。(中略)馬の嘶きを真似て、それにできるだけ合わせるようにして同時に、大きな声で“Yahoo”と言ってみたところ、彼ら双方が明らかにびっくりしていた。(中略)すると鹿毛(かげ)の方の馬が2つ目の語も言わせようとしたが、こちらは言うのがもっと難しかった。これをあえて英語の正字法で書くとなれば“Houyhnhnm”とでもなるだろうか。²

ここで、ガリヴァーは、発音困難な言葉を英語の正字法で表すことを“reducing”という言葉で表現している。馬語を英語で表そうとすることが、「格下げ」であるという含みが、“reduce”という動詞の使用に込められているように思う。また、この記述には“Houyhnhnm”という表記は、実際の発音を忠実に表しているものだとは限らない恐れがあるということも暗示されている。作品中の表記自体が、正確な発音を表すものではなく、あくまでも近似的なものに過ぎないのだ。“Houyhnhnm”に対して“Yahoo”という語については、ガリヴァーが発音に苦勞することはなかったようだ。“Yahoo”という語を何度も聞かされた後でガリヴァーがこの語を口にすると、その発音の見事さに馬たちが感動したということからも、発音が容易だったと分かるだろう。

馬たちとの出会いの場面で、彼らの種族名“Houyhnhnm”が発音困難だと強調されることには意味がある。ガリヴァーは、4回の航海を繰り返すうちに、とりわけ「第4渡航記」での経験の後、人間嫌いの傾向を強くする。その一方、彼はHouyhnhnmたちには心酔し、最終的には人語と同様に馬の言葉も解するようになる。当然ながら、初めの頃は発音に困難を感じていた“Houyhnhnm”という言葉も、他の馬語と同様に無理なく自然に発音できるようになっていったはずである。難しい“Houyhnhnm”という言葉の発音を克服していくのと並行して、ガリヴァーはHouyhnhnmたちの性質や生き方を身につけていったと言えるのではないだろうか。

Edition of the Works of Jonathan Swift, 16 (Cambridge UP, 2012), 338.

以下、スウィフトの原文からの引用はこの版により、ページ数を末尾に記す。
² 引用の日本語訳は拙訳。高山宏訳『ガリヴァー旅行記』(研究社〈英国十八世紀文学叢書 2〉、2021年)、富山太佳夫訳『ガリヴァー旅行記』(岩波書店〈ユートピア旅行記叢書 6〉、2002年)、中野好夫訳『ガリヴァー旅行記』(新潮社、1992年改版)、平井正徳訳『ガリヴァー旅行記』(岩波書店、1980年)、山田蘭訳『ガリバー旅行記』(角川書店、2011年)等を参考にした。

“Houyhnhnm”とは逆に“Yahoo”という語の発音が簡単であったことにも意味がある。Yahooたちは、この上なく醜いが人間と共通点もある生物とされている。体つきは人間とほぼ同じだが、鋭い爪や体毛などが全く異なる。その性質は人間のもつ愚かさや邪悪さを拡大して描かれている。一見すると人間とは別の生物のようではあるが、ガリヴァーが身近に観察するにつれて、あるいはHouyhnhnmの主人との対話を通じて、彼らがまさに人間であることが読者に次第に分かってくるような作品構成になっているのだ。もし、Yahooが、ガリヴァーあるいは人類一般が持って生まれた悪辣な性質を体現するものであるならば、初めから“Yahoo”という語をガリヴァーが（あるいは我々が）何の困難もなく発音できるのは、当然なことではないだろうか。ガリヴァーが最初から“Yahoo”という言葉を手軽に発音できたこと、あるいは人間にとって“Yahoo”が発音可能な言葉であるということによって、人間はYahooという奇妙な生物の悪辣で矯正し難い「獣性」と同じ性質を隠し持っているという不都合な事実が暗示されているのかもしれない。ガリヴァーも含めた我々人類は皆Yahoo的な性状を抱えているからこそ、“Yahoo”という語を手軽に発音できるという図式になっているのだ。一方、“Houyhnhnm”という語は、ガリヴァーをはじめとした我々人間がHouyhnhnmたちの高尚な性格とは、かけ離れた存在であることを暗示すると解釈できるのである。

もっとも、作者スウィフトがYahooやHouyhnhnmという見慣れない種族名に上で述べたような意味を込めていたかどうかは定かではない。作品全体の構成、作品に込められたメッセージから導き出せる仮説の1つに過ぎない。“Houyhnhnm”は馬の嘶きにヒントを得た語であることには疑いの余地はないし、一方の“Yahoo”にしても、日本語の「イヤ」に相当する嫌悪の感嘆詞“Yah!”と“Ugh!”とを組み合わせて作られたという説が古くからあるが、おそらく間違いはないであろう。³ 両者の発音の難度の差は、元になっている音または言葉自体が原因だと考える方が妥当だろう。つまり、“Houyhnhnm”は馬の嘶き、“Yahoo”は人間の感嘆詞を元にしたものであるならば、人間が正確に発音しようとする際に差があつて当然である。このような事情に加えて、両種族の名称の発音の難易度の差が、Houyhnhnmを崇め、Yahooと同一視できる人間を忌み嫌うようになるガリヴァーの心情を反映するのだという解釈をして

³ Paul Turner 編、Oxford World's Classics の *Gulliver's Travels* (1971) の注(362頁)には次のようにある。“The simplest derivation of the name [Yahoo] is from two exclamation of disgust: 'yah!' and 'ugh!' (Morley, *GT*, 1890, pp. 15, 20).” ただし、新版 (Claude Rawson 編、1986) では、この Morley の語源に関する注は見られない。注にするまでもないという理由からであろう。

も、的外れではないように思う。

II

さて、“Houyhnhnm”という語の発音の難しさについてさらに考えてみたい。すでに述べたように、この語の発音の難しさは、この語の後半の“hnhnm”の部分に集中しているようだ。小澤正人は以下のように指摘している。

英語のアルファベットはそれぞれが子音や母音を示すため、その組み合わせは英語としては不自然な連鎖や、発音できない連鎖を作ることが可能で、結果として発音困難な、あるいは発音不可能な単語を作ることができる。

一義的で、対象を明確に示すはずの名前が、発音の困難な、あるいは不可能な単語である時、それは読み手を驚かせたり躊躇させたりする。⁴

まさに“Houyhnhnm”こそが、小澤の言う「発音不可能な単語」の一例であろう。Wikipediaでは“Houyhnhnm”の発音について以下のような解説がされているが、このような解説は作者スウィフトの意図を十分に汲んだものとは言えない恐れがある。すでに述べたように、この語は人間にとって簡単に発音することができてしまうものではないからだ。

The name is pronounced either /'hu:məm/ or /'hwɪnəm/. Swift apparently intended all words of the Houyhnhnm language to echo the neighing of horses.

この解説の中でも、スウィフトがHouyhnhnmの言葉を馬の嘶きを反映したものにしようとしたことは説明されている。しかし、発音記号を使って人間に発音可能な音を提示した瞬間に、人間には発音不可能なはずの言葉が発音することが可能な言葉へと変化してしまう。確かに、ある言葉を発音することができ

⁴ 小澤正人「“Vril”を読む：『来るべき種族』の翻訳を通して」『ことばの世界：愛知県立大学通訳翻訳研究所年報』第11号11-23頁、愛知県立大学 通訳翻訳研究所、2019年。

<https://aichi-pu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=4237&item_no=1&page_id=13&block_id=17> (2022年3月30日閲覧)

なければ、何かと不便であるから、発音ができるようにする配慮もしくは妥協をすること、即ち何らかの（不可能ではない発音）を提案すること自体は必要なことであろう。しかしながら、本来は発音ができないはずのものを容易に発音できるようにしてしまうことには、やはり問題が残ると言わざるを得ない。“Houyhnhnm”という語をどう発音するかについて、もし本当に表記の通り読もうとすれば、誰しかなり苦労することは確かだろう。しかし、その苦労はWikipediaの解説に挙げられた発音のいずれかを採用すると、ほぼ解消される。それと共に“Houyhnhnm”は、曲がりなりにも英語として（読むことができる語）に「格下げ」されてしまうだろう。

これと同じことは、“Houyhnhnm”という語を日本語で表記する場合にも当てはまる。Wikipediaの解説に挙げられた発音を、あえて日本語に置き換えてカナ表記をすれば、/ˈhuːɪnəm/ は「フーイナム」もしくは「フーイヌム」となる。また、/ˈhwiːnəm/ は「フウィナム」か「フウィヌム」となるだろう。ちなみに、OEDの“Houyhnhnm”での発音の指示は（hwi·hn'm, hwi·n'm）となっている。これらは、「フウィフナム」か「フウィナム」と表記できる。OEDで提示されている発音の方がWikipediaの解説の発音よりは、英語としても発音することが多少難しい印象である。ケンブリッジ版のスウィフト全集の『ガリヴァー旅行記』では発音記号を避けて“Houyhnhnm: probably to be pronounced 'whinnims', thus evoking the whinnying of horses.”（329）と英語の綴りで発音を説明しようとしている。カナ表記では「フウィニム」とでもなるのだろうが、“hnhnm”の部分にはないはずの母音“i”が入っている。Wikipediaの解説に挙げられた発音の例と同じく、これもあまり感心しない。“Houyhnhnm”を日本語で表記する難しさの中には、最初の子音をどのように表記するべきかという問題も含まれるだろう。英語で“Houyhnhnm”を発音するときには、上に紹介したWikipedia、OED、ケンブリッジ版のスウィフト全集の全てで、最初の“H”の発音に/hw/という子音を当てている。この音を日本語でカナ表記することは容易ではない。「フウ」とか「フー」と表記しても良いと思うが、あくまでも近似的な妥協の産物であるに過ぎない。

『ガリヴァー旅行記』を日本語に翻訳しようとする際、原作者スウィフトの意図を反映するためには、“Houyhnhnm”をどのようにカナ表記すれば良いだろうか。日本語に翻訳したものを読む場合は、英語で作品を読む場合とは、また異なる問題が生じてくる。小澤正人が述べているように「日本語の仮名は各文字がすべて発音可能であり、仮名を続けても発音不可能な単語を作ることはできない。結果として、単一の発音可能な読み方を強制されると言ってもいい」という特性が日本語にはある。「フーイナム」や「フーイヌム」にせよ、「フウ

イナム」や「フウイナム」にせよ、一旦カナを当てられたら、我々はそれらを極めて簡単に発音できてしまう。これでは“Houyhnhnm”を「人間には発音が困難な語」とした作者の意図を無視してしまうことになる。英語の場合よりもっと具合が悪いことになってしまうだろう。英語で読む場合ならば、読者は“Houyhnhnm”という語を目にする度に、この語の発音の難しさを意識する。その言語が表す不思議な馬の種族が、人間とはかけ離れた存在であることも強く意識するだろう。これに対し、日本語訳を読む読者が目にするのは、容易に〈読める〉カナ表記に過ぎない。馬の種族の持つ不思議さや高貴さも相当割引かれてしまうことになってしまうのではないか。

ここで最近の『ガリヴァー旅行記』の翻訳の中から、現状で我々が目にすることのできる“Houyhnhnm”に対する主なカナ表記を挙げてみよう。ここで言う最近の翻訳とは、基本的に第二次世界大戦後に出版された現代語訳のことである。おおよそ年代順に列挙すると以下ようになる。

- 原 民喜「フウイナム」『ガリバー旅行記』主婦の友社、1951年
中野好夫「フウイナム」『ガリヴァ旅行記』新潮文庫、1951年
中野好夫「フウイナム」『続ガリヴァー旅行記』岩波少年文庫、1951年
江上照彦「フウイナム」『ガリバー旅行記』社会思想社、現代教養文庫、
1970年
梅田昌志郎「フウイナム」『ガリバー旅行記』旺文社文庫、1976年
平井正穂「フウイナム」『ガリヴァ旅行記』岩波文庫、1980年
加藤光也「フウイナム」『ガリバー旅行記』講談社青い鳥文庫、1992年
富山太佳夫「フウイナム」『ガリヴァ旅行記』岩波書店、2002年
坂井晴彦「フウイナム」『ガリヴァ旅行記』福音館文庫、2006年
山田 蘭「フウイナム」『ガリバー旅行記』角川文庫、2011年
高山 宏「フウイナム」『ガリヴァ旅行記』研究社、2021年
柴田元幸「フウイナム」『ガリバー旅行記』朝日新聞連載、2021・22年

何と、江上照彦の「フウイナム」を除き、どれも皆「フウイナム」ではないか。江上訳は全訳ではないが、これを除外すると、すでに我が国の翻訳では、「フウイナム」という表記が定着してしまっていることが分かる。例外の江上訳についても、確信があって「フウイナム」にしているかといえば、そうでもないようだ。本文中の割注では「いろんな発音があるが、もともと馬のいななきのヒ

ヒンにゆらいする」⁵と書かれているだけで、一般的な「フウイヌム」ではなく「フウイナム」にした理由は特に説明されていない。別に「フウイヌム」でも良かったのかもしれないと思われる。また、上に挙げた翻訳のうち、原民喜や加藤光也らの翻訳も全訳ではなく再話だが、やはり表記は「フウイヌム」である。第2次大戦後の翻訳リストを見る限り、“Houyhnhnm”の表記は「フウイヌム」に定まっていて、ほとんど見直しが行なわれていないと言える。何故「フウイヌム」が定着してしまったかについては、様々な理由が考えられるだろうが、特に読者層の厚さ、すなわち影響力の大きさから推察して、中野好夫による翻訳の影響が非常に大きいのではないだろうか。彼は、戦前から『ガリヴァー旅行記』の紹介に努めていて、再三再四各種の翻訳版を出版していることは周知の事実だろう。中野好夫にどれほど多くの種類の訳業があるかについて詳しくは、松菱多津男『邦訳「ガリヴァー旅行記」書誌目録』（春風社、2011年）を参照されたい。ただし、中野は常に“Houyhnhnm”を「フウイヌム」と表記しているわけではない。『ガリヴァー』の作者の死では「フウイヌム」と、少し表記を変えている。岩波新書の『スウィフト考』では「フィナム」と、これまた微妙に異なる表記をしてある。⁶しかし、これらの表記の使用回数は、その他の中野訳に「フウイヌム」が登場する回数に比較すると、はるかに少ない。当然のことながら、読者の目にとまる回数も「フウイヌム」とは比較にならないだろうから、ここでは例外的なものとして無視して良いだろう。中野好夫の翻訳においては「フウイヌム」が主な表記と考えて良い。

影響の大きさ点で言えば、原民喜の再話『ガリバー旅行記』の存在も捨て難い。原民喜は原爆体験以後に培った独自の世界観に基づいて再話をしたのだが、彼による固有名詞の表記も、“Yahoo”を「ヤフー」でなく「ヤーフ」とするなど、かなり独特である。ところが“Houyhnhnm”に関しては、中野好夫訳と同じく「フウイヌム」で、奇を衒った表記はしていない。原民喜の『ガリバー旅行記』は講談社文芸文庫にも収められていて、現在でも入手できる。さらにはインターネット上の「青空文庫」に収められていて、いつでも気軽に読むことができる。⁷原民喜以外の翻訳は、現状ではインターネット上でも無料では読めない

⁵ スウィフト作、江上照彦訳編『ガリバー旅行記』社会思想社（現代教養文庫）1970年、195頁。

⁶ 鶴見俊輔他編『いのちの書』〈ちくま哲学の森 2〉（筑摩書房、1989年）235頁並びに中野好夫著『スウィフト考』（岩波新書、1969年）109頁参照。

⁷ ジョナサン・スウィフト（Jonathan Swift）原民喜訳『ガリバー旅行記』（Gulliver's Travels）青空文庫。

<https://www.aozora.gr.jp/cards/000912/files/4673_9768.html>（2022年3月30日閲覧）

から、この再話はこれからも長期にわたって影響を与えていく可能性があるだろう。⁸

なお、『ガリヴァー旅行記』関連の出版物には絵本の類も多いが、「フウイヌム」に関しては絵本からの影響はあまりないと考えられる。『ガリヴァー旅行記』を絵本化したものには、第1篇「リリパット渡航記」のみで済ます例が圧倒的に多く、最終第4篇までも絵本に仕立てる例は極めて少ないからだ。よって、絵本になった『ガリヴァー旅行記』の影響は無視して良いだろう。同じことは英語の教科書に採用された『ガリヴァー旅行記』の再話にも当てはまる。大抵の場合、第1篇「リリパット渡航記」が使用されるだけである。第4篇中の“Houyhnhnm”の訳し方が「フウイヌム」に定まった経緯についての考察に関しては、教科書類も絵本と同様に無視して良いだろう。どんな経緯があったにせよ、我が国の“Houyhnhnm”の訳は、多少の例外はあるものの、かなり以前から「フウイヌム」に固定化されているということだけは確かだ。

ところで、上記のリストからも分かるが、2020年代に入り『ガリヴァー旅行記』の翻訳が活況を呈してきている。高山宏、柴田元幸といった錚々たる顔ぶれの翻訳者が新訳に取り組んでいるのは喜ばしいことだ。⁹ しかしながら、残念なことに、これらの訳でも“Houyhnhnm”に対する表記は「フウイヌム」が踏襲されてしまっている。すでに確認したような表記が定着した経緯を見れば致し方ないことではある。だが、柴田元幸氏が朝日新聞に連載した翻訳は、いつ単行本になるか不明だが、出版されることになったら“Houyhnhnm”の表記については、従来のみで良いかどうか一考して頂きたいものである。また「学魔」の異名を持つ高山宏氏にも、研究社版『ガリヴァー旅行記』を再版する機会が訪れるならば、一考を期待したい。彼の場合、“Houyhnhnm”に対して新たな漢字表記を提案するのではないかという期待もできる。高山氏は、『新注 鏡の国のアリス』で見事としか言いようのない様々な当て字、「蛇馬魚鬼」や「蛮駝支那魍」を考案、発明したという実績があるからだ。¹⁰ これらは、通例「ジャバーウォッキー」、「バンダースナッチ」とカタ仮名で表記されるものであるが、意味を込めた漢字を用いることで、その禍々しさや奇妙さが一層高

⁸ 山田蘭訳の『ガリバー旅行記』は Kindle Unlimited で読めるのだが、こちらは有料である。朝日新聞連載の柴田元幸の『ガリバー旅行記』も、その全文を読むためには有料で購読する必要があった。

⁹ 両者に加えて、2016年の柳瀬尚樹の翻訳もある。ただし、これは訳者の死去により冒頭部のみであり、未完に終わってしまっている。

¹⁰ 本論への引用では省略したが、漢字には「ふりがな」が振られていて読み易さへの配慮もされている。ルイス・キャロル著、マーティン・ガードナー注、高山宏訳『新注 鏡の国のアリス』（東京図書、1994年）29頁。

められ、非常に効果的であった。2019年の『詳注アリス 完全決定版』では、上記の2つは「蛇馬魚狗」と「蛮駝支那蜘蛛」となっていて、それぞれの末尾の漢字が変えられている。新旧どちらが良いかは判断が別れようが、読者のインスピレーションを触発する点で甲乙つけ難い。¹¹ 故柳瀬尚紀も同様に漢字を上手く操った手練れの翻訳家であった。彼は「ジャバーウォッキー」を「邪歯羽尾ッ駈」、「バンダースナッチ」を「蛮駝栖那ッ致」としている。¹² これまた読む者の感興をそそる工夫に満ちた表記である。柳瀬氏の『ガリヴァー』の翻訳が未完に終わったことは、非常に惜しまれる。

翻訳や再話以外での“Houyhnhnm”の表記も確認してみよう。『ガリヴァー』を扱った各種の論文や随筆の類に目を広げても、現状では「フイヌム」に固定化されている。いくつか例示すると、千森幹子の『ガリヴァーとオリエント』では一貫して「フイヌム」となっている。本書の凡例の4番目として、以下のような断り書きがしてあることに注目したい。

四、日本の邦訳における『ガリヴァー』作品中の名称や人名の日本語表記は、それぞれ微妙に異なるが、本書では、直接的な引用を除き、基本的には、「ガリヴァー」「ヤファー」「リリパット」「ラピュータ」などの表記に統一している。¹³

さまざまな形で流布してしまっている固有名詞を一つの表記にまとめるという操作は、書物の統一性を保つ必要性から考えても、正当な措置であることは言うまでもない。今ここで気付かされるのは、上記の例の中に「フイヌム」が入っていないということである。おそらく、千森氏は「フイヌム」については表記が微妙に異なっていない、すでに定まっている、と考えているのだろう。千森氏のような碩学が「フイヌム」という表記を使用することで、今後ますますこの表記の定着が促進され、異論をさし挟む余地がなくなっていくという可能性が高くなるだろう。

同じことは、原田範行の『NHK カルチャーラジオ 文学の世界 風刺文学の

¹¹ マーティン・ガードナー、ルイス・キャロル著、高山宏訳『詳注アリス 完全決定版』（亜紀書房、2019年）334頁。

¹² ルイス・キャロル著、柳瀬尚紀訳『鏡の国のアリス』（筑摩書房、ちくま文庫、1988年）30頁。こちらも「フリガナ」が施されている。上記の高山訳の方はいずれも平仮名であるが、柳瀬訳はカタ仮名であり、印象がかなり異なる。

¹³ 千森幹子『ガリヴァーとオリエント 日英図像と作品にみる東方幻想』（法政大学出版局、2018年）10頁。

白眉『ガリバー旅行記』とその時代』にも当てはまりそうだ。この冊子はラジオ番組のテキストとして出されたものだが、内容的にも非常に素晴らしい。これをどのくらいの数の人々が目にしたかは判然としないが、ラジオ番組で放送されたこともあり、影響は相当大きかったのではないか。また、原田範行らの『徹底注釈』でも「フウイヌム」の表記になっている。「本文編」の訳者である富山太佳夫が「フウイヌム」を使用している以上、これを他に取り替えることは無理な話であるから、「フウイヌム」のままにしておく必要があったのだろう。

古いところでは、阿刀田高『あなたの知らないガリバー旅行記』（新潮社、1985年）でも「フウイヌム」であった。この一般向けの入門書は、作品からの引用をする際、平井正徳による翻訳を用いているので、平井の「フウイヌム」を踏襲していても不思議はない。また、阿刀田氏は、中野好夫のガリヴァー関係の文章も座右において執筆したようだ。すでに述べたように中野好夫氏の著作でも、一部の例外はあるが、“Houyhnhnm”の表記は「フウイヌム」であった。以上のように見てくると、“Houyhnhnm”の日本語表記は「フウイヌム」以外のものが提案される機会がないままになっているのだろう。すなわち、個々の書物が単独で表記の定着に影響を与えてきたというよりはむしろ、書物の書き手の間で同じ表記が拡大再生産され、その結果として一つの表記に定まった結果として「フウイヌム」という表記が当然のもののように広まり、現在の日本語訳の表記において盤石な地位を得ているのだと考えられる。

III

しかしながら、本来“Houyhnhnm”という語が持つ発音の不可能性を無視して、「フウイヌム」という画一的な表記に安住してしまうという姿勢は、ある意味で権威主義的で無批判な思考停止以外の何物でもない、という誹りを免れない面もあるだろう。これは特に文学関係者に見られる傾向であるかもしれない。¹⁴ こうした人々、すなわち翻訳や文学研究を業とする人々よりもむしろ、その他の分野の専門家の方が、「フウイヌム」という表記に拘泥していないのではないか。例えば、紀平英作編『グローバル化時代の人文学 対話と寛容の知を求めて』（京都大学学術出版会、2007年）の中の金田章裕「ガリバーからゴールドラッシュへ——英国の世界認識と世界覇権をめぐる」では、1箇所だ

¹⁴ 例えば、Mark Twain は「マーク・トウェイン」と書くのが普通だが、「トゥウェイン」が正しい。Brontë も「ブロンテ」ではなく「ブロンティ」であるはずだ。Lilliput も「リリパット」ではなく「リリプット」とすべきかもしれない。我々が慣例的な表記に囚われている例は、他にも沢山ありそうである。

けではあるが「フーイナム」(251)という表記が見られる。著者の金田章裕は、京都大学で長く教鞭をとった地理学研究者だ。そのため、英文学の世界で「フウイナム」という表記が定着していることには拘らず、独自の「フーイナム」という表記をしたのだろうか。また、最近のインターネット上の雑誌、いわゆるWEB雑誌で、“HOUYHNNHM”という誌名のものである。¹⁵ このWEB雑誌は、現代の若者向けのファッション情報を集めたもので、時事的、文化的なエッセイも読めてなかなか見どころの多いものだ。元の誌名は英字の“HOUYHNNHM”なのだが、これの日本語カナ表記は「フイナム」と記されている。カタカナ4文字の「フーイナム」の短縮版といったところだが、シンプルで良い。もっとも、「フーイナム」にしても「フイナム」にしても、現状で流布している「フウイナム」と全く異なる斬新な表記であるという訳ではない。微妙な違いしかないとは断じることもできる。結局のところ、それぞれの表記を考えた者が文学関係者だろうが、地理学者やメディア関係者だろうが、元の表記“Houyhnhnm”の発音の難しさや、奇妙さを生かすことに拘泥するよりは、日本語として発音し易いことや、印字や印刷がし易いことを優先しているということであろう。言い換えれば、ご都合主義ないしは功利主義が罷り通っているということになる。筆者の見解としては、これは決して褒められた現状ではない。

「フウイナム」に固定される以前の過去に遡ってみると、現状とは異なり、本当にさまざまな表記が試みられていた。現在の統一的な表記「フウイナム」に至るまでの古人の苦勞が偲ばれて大変興味深い。昔の訳者はそれぞれが様々に工夫を凝らしていて、画一的な「フウイナム」という表記に安住してないように見える。今の「フウイナム」に定着する以前の例をいくつか挙げておこう。ただし、以下に挙げる表記も“Houyhnhnm”の発音の難度を示したり、作者スウィフトの意図を尊重したりするために考案されたものではない。むしろ、外国語を日本語に置き換える際のカナ表記を考案する苦勞が忍ばれるものであるという点には注意しておきたい。

まず、町野静雄が訳した『ガリヴァー旅行記(下)』(改造社、1941年)では「ハウインナム」という表記がなされている。¹⁶ 「ン」を2回記していて、原

¹⁵ 「ヒップなファッション、カルチャー、ライフスタイル WEB マガジン | HOUYHNNHM (フイナム)」 <<https://www.houyhnhnm.jp>> (2022年3月30日閲覧)

¹⁶ 国立国会図書館デジタルコレクション

<<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1689657>> (2022年3月30日閲覧)

綴りの“hnhnm”の部分を何とかカナ表記で示そうとしているようだ。冒頭の「ハウ」も、現代の表記を見慣れた我々からの目にはかなり珍しい。翻訳者による注を見てみると、ドイツ語での表記が“Hauyhnhnm”であることを根拠にしているらしい。ただし、ヨーロッパ諸語の中でドイツ語がいくら馬の鳴き声に最も近いとはいえ、これだけをもって「ハウインム」という表記が正しいことにはならない気がする。筆者は『ガリヴァー旅行記』の中の、ドイツ語と「馬語」の近さを述べた以下の記述を念頭に上のことを述べたのだが、下記の引用は、その内容をまじめに受け取るよりは、一種の冗談とみなした方が良くかもしれない。

In speaking, they pronounce through the Nose and Throat, and their Language approaches nearest to the *High Dutch* or *German*, of any I know in *Europe*: but is much more graceful and significant. The Emperor *Charles V.* made almost the same Observation, when he said, That if he were to speak to his Horse, it should be in *High Dutch*. (348)

彼らが話をするときは、ひどく鼻と喉にかかった発音をする。そしてその言葉は、私の知っているヨーロッパ語の範囲では高地オランダ語すなわちドイツ語に一番近かったが、こちらの方が遥かに優美で含蓄があった。皇帝カール5世は、もし自分が馬に話しかけるなら高地オランダ語を使うと言ったが、これとほとんど同じ観察をしていた訳だ。

以上の箇所は、ドイツ人やドイツ語に対する風刺と考えても良いだろう。このように『ガリヴァー旅行記』には、断片的に風刺の対象が散りばめられている。それらを拾い上げる行為自体が意味を持つのであるが、この記述だけを根拠に、ドイツ語の“Hauyhnhnm”に基づく町野の「ハウインム」が正しい表記であると断定するまでの結果にはならないだろう。影響の大小に関していえば、町野静雄の訳は改造文庫の1冊、第2部第495篇である。当時どのくらいの発行部数があったか、現状では詳ではないが、文庫という形態を鑑みると、かなりの数の読者を得ていたものと思われる。¹⁷しかし、町野訳が出たのとほぼ同時に、中野好夫らの「フウイヌム」の表記が広く定着しつつあった。町野の「ハ

17 「此の文庫は、内容厳選と最低の廉價とを以て第一義とし、専ら大衆普及を目的として刊行す」との言葉が「奥付」に見える。

ウインム」という表記は、結果として淘汰されてしまったのであろう。町野訳以後は、この表記は見られないようである。ただ、「ン」を敢えて2回繰り返している点は綴り文字にある程度即しているという理由で評価したい点である。

明治期に遡ると、夏目漱石は、『文学評論』でスウィフトの伝記と作品を論じた際、「フーインムス」という表記によっている。ただし「国立国会図書館デジタルコレクション」で見ることのできる版本では、どういう訳か1箇所だけ「フーンムズ」となっている。春陽堂の1909年の版であるが、おそらくこれは単なる誤植であろう。念のため、以下に「フーンムズ」という表記が登場する箇所を国会図書館のサイトから引用しておく。¹⁸

是は寧ろ諷刺ではない。悪口に近い攻撃である。何でも無い様だけれども、人間の動物と違ふ所は、食ひたくないのに食つたり、飲みたくないのに飲んだりする點にもあるんだから、そこが一寸面白い。あとは大した才もない。云はうとすれば普通の人にも云へる。然し相手がフーンムズなる馬であつて、其馬が、成程人間と云ふ動物は、そんな譯の解らない野郎か、と聞いてゐるんだから、随分厭になる。(405頁)

元の版は縦書きとなっており、文中の「フーンムズ」の下線は実際は傍線である。今筆者の手元にある岩波の全集では、この「フーンムズ」は「フーインムス」に修正され、他の箇所と統一されている。¹⁹

一方、漱石の『文学評論』を推奨した、戸川秋骨による表記も非常に興味深いものだ。シンプルに「夏目漱石氏の文学評論を読む」と題された短文の中でこの表記は「フーインムス」なのである。この表記でまず目を引くのはその冗長さだろう。厳密なことを言えば、前半の「フーイン」の箇所は、元の英語綴りの“Houyhnhnm”の前半部分の“Houy”とは一致していない。しかし、“Houyhnhnm”という言葉が持つ玄妙不可思議な雰囲気は、逆によく伝わってくる。元の綴りからすると間違っている部分があるという問題点を超えて、全体として、人間の理解を超える“Houyhnhnm”という生物を表現するのにかなり相応しい表記になっていると言って良いだろう。問題は、現在では戸川秋骨の表記がインターネット上でしか見られないという点だ。元の印刷物でも本当にこの表記がなされていたかどうかを確かめることができない。注記による

¹⁸ 国立国会図書館デジタルコレクション

<<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/871768>> (2022年3月30日閲覧)

¹⁹ 『漱石全集』第15巻(東京:岩波書店、1995年)316頁参照。

と、元の戸川の評論は、明治 42 年 7 月 23-29 日付『東京二六新聞』に掲載された。その後、同じ文章が角川書店の漱石全集の第 15 巻に収められた、ということであるらしい。²⁰ 新聞の記事、角川的全集版、ともに筆者は未見だが、とりあえずはインターネット上に掲載されている文中の表記を興味深い事例として挙げておきたい。

「フウイヌム」という表記を見慣れた今の我々にとっては、一般的でないに見える、興味深い表記の例をさらに挙げよう。漱石や秋骨と同時期の、スウェプト著、佐久間信恭訳『新譯 ガリヴァー旅行記』（尚栄堂、1911 年）での表記である。²¹ これは松菱多津男がまとめた『ガリヴァー旅行記』の日本語訳の目録の 19 番目に挙げられていることから分かるように、本作品のかなり初期の翻訳の一つである。その目次を見ると、第 4 篇は「怪馬国旅行記」とされており、第 4 篇第 7 章の章題は「ヤーファーの事情○ホウインハムの徳行○其少年の教育○会議」とある（326 頁）。「Houyhnhnm」に対して「ホウインナム」という大変珍しい表記がなされている。ただし、本書の目次のページでは、「ホウインナム」ではなく「ホウイン公」となっている（7 頁）。この書物は縦書きであるので、上と下に並んだ「ハ」と「ム」が上下方向に縮められ、一文字分のスペースに収められたように見える。つまり、カタ仮名の「ハ」と「ム」が合体して漢字の「公」になっているのだ。「ホウイン公」が単なる誤植でなく、表記上の工夫であった可能性もある。「公」という漢字を印刷し、それを「ナム」と読ませようと意図してあるという解釈である。今後我々が「Houyhnhnm」の表記を考える際の参考にしてみたい。

ところで、この佐久間信恭による翻訳には用語の不統一が散見される。「Houyhnhnm」の表記も、「ホウインナム」で一貫してはおらず、一部「ホウインム」という表記も見られる。²² 特に、「怪馬国旅行記」の後半では、表記が定まっていない。このような表記の不統一は、やはり出版の年代が古いせいもあるだろう。さらには、表記の不統一が訳者の思い違いによって生じている可能性もある。国会図書館の画像を拡大して見てみると、「それは英語の字母に直すとホウインナム（Houyhnhnm）といふのである。」（262 頁）と記載されてい

²⁰ 戸川秋骨「夏目漱石氏の文学評論を読む」日本文学電子図書

<http://promeneur-libre.raindrop.jp/literature/pdf_jp/TogawaShukotsu_Soseki-Bungakuhyoron.pdf>（2022 年 3 月 30 日閲覧）

²¹ 国立国会図書館デジタルコレクション

<<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/896774>>（2022 年 3 月 30 日閲覧）

²² 例えば、第 2 章の章題「ホウインムに導かれて其の家に詣る○家の記事○馬の食物○食事の方法」では「ホウインム」である。

る箇所があるのだ。括弧中の英語綴りが、本来の“Houyhnhnm”ではなく、“Houyhnhum”と微妙に変更されてしまっている。仮に、佐久間が馬の種族の名を“Houyhnhum”だと思っていたのなら、「ホウインハム」というカナ表記を当てることは決して不自然ではないように思える。佐久間が「ホウインハム」と表記したのは、彼の手元にあった原作（洋書）の綴り字自体が間違っていたためなのか、あるいは彼が見間違えたためなのかは分からない。『ガリヴァー旅行記』翻訳の黎明期に、先駆者として不可避免的に犯してしまったミスの一つであろうか。ついでながら、この訳者が“Yahoo”を「ヤーフー」と表記しているのも、原民喜の「ヤーフ」を除き、ほぼ例外なく「ヤフー」という表記がなされる現代語訳を見慣れている我々の目から見て、かなり斬新である。しかし、この表記も「ホウインハム」と同じく、原文の印刷ミスや翻訳者の勘違いに基づいているのかもしれない。佐久間の翻訳は、上述した以外にも検討すべき問題を抱えていそうである。今後の研究課題としたい。

IV

ここまでの議論は、表記の奇抜さばかりに着目することになってしまったかもしれない。しかし、元を正せばスウィフトが人間には本来発音が不可能な言葉として、“Houyhnhnm”という綴りを考えた意図を、日本語訳にも反映したいということが、この論の発端だ。我々人間の発声器官では簡単に発音できてはいけなはずの言葉が、日本語に訳した場合には、それがどのような表記であれ、カタ仮名を当てはめる限りにおいては、我々には易々と発音できてしまう。この問題をどのように解決すべきなのだろうか。

解決策として考えられるのは、カナ表記を発音不可能であるとはまでは言えなくとも、相当難しいものにするところだろう。その一例として、小澤正人が提示している「フーイッンツム」という案に注目したい。作者スウィフトの当初の意図を最大限に尊重する試みとして称賛に値する、この小澤の考案を少し詳しく見ていこう。彼は、“h”を呼気として無理に促音（「ッ」）にした、と述べている。（14 頁）呼気を促音にする根拠は判然としないが、誰しもこの表記を一見しただけで、発音することはかなり難しそうだということだけは理解できるだろう。特に「ッンツ」という表記と同じ文字列を筆者はこれまでに見たことがない。これを発音することは、不可能ではないにせよ、かなり難しそうであるのは疑いないところだ。この表記に辿り着いたこと自体が評価に値すると言っても良いだろう。しかしながら、この表記には難点がないわけではない。具体的には、“hnhn”の部分が果たして「ッンツ」と促音を使った表記で処理し

て良いかという点だ。先に筆者が提示した英語での読み方として「声門摩擦音 /h/ と歯茎鼻音 /n/ の2つの子音を重ね、“hn”、“hn”と2回素早く繰り返せば良い」などと書いた。この場合、小澤案のように促音が入る余地はなく、「フンフン」に近い感じになるはずだ。元来は発音しにくいことを目指した表記であるので、促音かどうかなどということは瑣末な事柄かもしれない。しかし、小澤案を検討していくと、これよりも少し良い案はないだろうかと考えてみたくなるのも事実である。

そこで、“Houyhnhnm”の様々なカナ表記を列挙した上で、最終的にどのような表記が妥当か、現時点での筆者の案をいくつか提示してみたい。まずは「フウイフンフム」である。²³ 英語の綴りで子音字4文字の連続を素朴にカタカナで表すとしたら、通例、“bnbn”なら「ブンブン」、 “pnpn”は「プンプン」、 “knkn”なら「クンクン」とするであろう。同じように考えてしまえば、“hnhn”なら「フンフン」となるだろう。英字をカタカナで表すときには、“n”には「ン」を当てはめ、それ以外の母音を伴わない子音字には日本語のウ段の字を、それぞれ当てはめることが多いだろう。ただし“tntn”は「ツンツン」ではなく「トゥントウン」とした方が良いだろう。これはむしろ日本語の「タ行」の発音がアルファベットで表記される“t”の音とどれだけ差異があるかという問題になろう。

母音を伴わない子音の発音をカナ表記する場合の通例に従うなら、“Houyhnhnm”の表記は「フウイフンフム」で、大体は良いように見える。しかし、これでは具合が悪い点もある。小澤正人も「フウイフンフム」に似た「フーイフンフム」という表記について、「英語での発音の困難さ(異質性)がほとんどなくなってしまう」(14頁)と述べているが、「フウイフンフム」という表記も同じ問題点を抱えている。さらに字面が英語表記と比較すると冗長だ。それならば「フ」を小さく書くというのはどうだろうか。もちろん、日本語には「小さなツ」や「小さなイ」はあっても、「小さなフ」などというものは存在しない。しかし、今ある文字を使う限りにおいては、どんな書き方をしようが発音することができてしまうという問題点の解決には、今は存在しない表記を発明して使うことくらいしかない。文字の大きさを変えるだけで、まったく存在しない字を捏造するわけではないので、日本語の表記法に対する変更

²³ 長音の「ー」を用いて「フーイフンフム」としても良いのであるが、本論ではこの語の前半部分より後半部分を特に問題視するので、ここは現状で流布している「フウイヌム」に合わせる形で「フウイフンフム」としておく。今後さらなる考察が必要であろうが、これの後に順次挙げる案でも、その前半部分は「フウイ」としておくことにする。

としては許容範囲内だろう。さて、「フ」を小さく書くとするとしても、手書きならごく簡単であるし、ワープロ入力ならフォントのサイズを小さくするだけで良い。印刷する場合も同じ措置は可能だろう。結果として著者の提案する表記の第2案は以下ようになる。

「フウイフンフンム」

これでもスウィフトの意図は反映できると思うのだが、「フ」が小さくなったことによって、2つある「ン」がかなり目立つ。また、一見したところ「イフ」や「ンフ」の連鎖が目についてしまい、少し収まりが悪い。日本人がこの表記を見た場合、大きく表記された文字「イ」や「ン」にアクセントをおいて発音するかもしれないという恐れが生じてしまう。「フンフン」の部分は本来は母音のない子音の連続なので、強勢を置かず素早くかつ平板に発声すべきだろう。発音もさることながら、文字の大きさも好ましくないように思う。小澤案の「フーイフンフンム」も「ン」がかなり目立っていたが、英語綴りでは同じような大きさの文字なのに、「フウイフンフンム」では見た目がアンバランスだ。そこで、次は「ン」も「フ」と同様に小さくしてみよう。これが第3番目の案ということになる。

「フウイフンフンム」

これで外見は相当良くなったのではないだろうか。「フンフン」の部分が小さくなったために、ここに妙なアクセントを置いてしまう余地も減る。字面だけ見ると、元の英語の“Houyhnhnm”にもかなり近づいた印象だ。しかし「フウイフンフンム」にも難点がある。最初の「フウイ」の部分が普通のサイズなのは良いとして、最後の「ム」についてはこの1字だけが普通のサイズなので、「ム」だけが目立ちすぎる。文字の大きさに比例して「ム」に強勢を置きたくなくなってしまいかもしれない。最後の「ム」も「フンフン」と同じくらいに小さくしてしまった方が良いのではないだろうか。すると次のような表記が考えられる。

「フウイフンフンム」

これだと確かに最後の「ム」は目立たなくなったので、その点は良い。だが、改めて全体を見てみると、単語の前半と後半が非常にアンバランスだ。そこで、これを「フウイフンフンム」に一度戻してから、今度は「フンフン」をいっそ

半角にしてみるというのはどうであろうか。半角の「フフン」にである。半角のカタ仮名自体は普段あまり目にする機会がないものだが、銀行振込を ATM で行なう際にはよく使用される。また、各種の名簿では人名の読み方をカナ表記する際に半角のカタが用いられていることもある。半角のカタを書くことは手書きでも可能である。ワープロでも印刷でも、何ら問題なく作成することができるはずだ。そこで、“hnhn”の箇所を半角の「フフン」にしてみよう。するとこうなる。これが第5案である。

「フウイフフンム」

この第5案が、現時点では筆者が最も納得のできる案だ。“Houyhnhnm”の中ほどの“hnhn”の箇所を半角のカタ仮名にすることで、普通の「ふんふん」、すなわち相槌を打つときなどに口にする「ふんふん」とはかなり異なる発音をすべきであるということも併せて表現することもできているように思う。「フフン」という箇所を素早く且つ人間らしくなく、馬の鳴きを真似るようにして言うということだ。またそれだけでなく、字面でもあまり凸凹のない自然な形に取めることができた。ただし、縦書きにする場合はどうかという疑問を持つ人もいだろう。この論文のように「フフン」と横書きする際は問題にならないが、我が国では多くの書籍は、依然として縦書きで印刷されることが多い。縦書きは、日本独自の文化として尊重すべきことであるのは言うまでもないが、上記の第5案を採用するためには、縦書きの書籍が多い現状は少々厄介のように思われるだろう。しかしながら、ワープロソフトの機能を活用すれば問題は解決する。いわゆる「縦中横」の機能を利用すれば良い。この機能を利用すれば、縦書きの中に「フン」と「フン」をこのままの形で縦に2つ並べて表記することが可能なのだ。もしそうすれば、横書きでは発音のしづらさが、あまり前面に出て来なかったのに対して、縦に並んだ「フン」と「フン」の表記は、「一体どう発音すべきなのだろうか」と読者の頭を悩ませる効果が高くなるのではないだろうか。つまり、『ガリヴァー旅行記』の原作を元の英語で目にした読者が“Houyhnhnm”という語を見た時と似た状況に、日本語訳の読者も置かれることになる訳である。あるいは、「フン」と「フン」をともに縦にした上で、左右に並列させるという方法もあろう。むしろその方が、縦書きの文章中にこの表記を見た際に、右側にある「フン」を先に、左側にある「フン」を後に読むことになって具合がなお良いだろう。いずれの書き方をする際も、「フウイフフンム」という表記は、横書きだけでなく、縦書きにも対応できるものなのである。

さて、本論では、“Houyhnhnm”を日本語に訳す際の新たな表記「フウイフ

フム」を提案したが、本論の読者の意見はいかがだろうか。もし、これがよろしいということになれば、今後は『ガリヴァー旅行記』を日本語に訳したり、『ガリヴァー旅行記』の“Houyhnhnm”について話題にしたりする際は「フウイヌム」「フーインム」「フイヌム」などに加えて「フウイフツム」という表記も使用することを、翻訳家諸氏や一般の読者の皆様にはぜひ検討して頂きたいものである。“Houyhnhnm”の表記について考察した直接のきっかけは、小澤正人の論考「“Vril”を読む：『来るべき種族』の翻訳を通して」の中で提案された表記「フーインツム」を目にしたことであったのだが、以前から本論の筆者は、“Houyhnhnm”という語をタイピングする際、“hnhn”の箇所では「フフ」と唱えながら打っていた。日本語でカナ表記する際もいっそのままで良いのではないかという感覚を持っていたからだ。こうした長年にわたって感じてきたことを今回やっと小論の形でまとめるに至ったのである。

結び

『ガリヴァー旅行記』の第4篇—筆者の最終案を採るならば、「フウイフツム 国渡航記」—は、結局のところ“Houyhnhnm”という発音不可能な種族名を設定したこと自体にスウィフトの皮肉な意図が表現されている。そう考えると、筆者のように“Houyhnhnm”の日本語表記にこだわってしまったのも、彼の術中に嵌っただけであるかもしれない。いろいろと検討してはみたが、結局のところ「フウイフツム」も発音不可能かと言えば、そのようなことはなく、半角の「フフ」の部分をも馬の気持ちで言うようにと指示するくらいが関の山である。所詮、人間は馬ではないので、問題は一向に解決していないようにも見える。もっと何か良い表記の方法がないかを考えることが今後の課題である。例えば「フウイフツム」や「フウイフツム」なども面白いのだが、縦書きに対応できるか否かの問題もあるので、今のところは「フウイフツム」で留めておくことにしようと思う。

さらには諸外国語でこの問題がどのように解決されているかを（あるいは、解決されていないかを）見て行くことも必要だ。諸外国語と一言で言っても言語の特性による問題をはらむので、比較はなかなか難しい。ここでは一つだけ、「慧駟」という中国語での表記を挙げるに留めよう。これは、文字の発音と意味を合致させるのに長けた人々によって作り出された、この上なく巧みな表記だ。その響みに倣って筆者なりに、以下の案を提示したい。

「忿威無」

「忿」は「憤」でも良い。これは言うまでもなくスウィフトの墓碑銘の中の言葉“saeva indignatio” (savage indignation、激しい憤怒) から着想した文字だ。「威」は「フウイフツム」の威厳を表す。場合によっては偉大の「偉」を当てても良いだろう、「無」は現実には存在しない架空の存在であることを暗に表してみた。画数が多くて煩わしいなら「無」は「无」としても良かろう。他にも色々なヴァリエーションが考えられそうだ。もちろんここで挙げた「忿威無」や「憤偉无」といった案は、現時点での仮の案に過ぎない。何よりも肝心の「フツツ」の部分の音が忠実に表されていない嫌いがある。今後さらに、これよりも“Houyhnhnm”に相応しい漢字表記を考えてみたい。例えば、中国語の表記で“Yahoo”は「狻猊」だが、これは音と意味だけでなく、字面までも猙獰な感じがする見事な当て字だ。筆者もこれと同じような案を“Houyhnhnm”についていつか考案したいものである。また、本論の読者の皆様にも是非とも新しい表記を考案して頂きたい。固有名詞を漢字を使って表記するという試みは、漢字文化を持つ我々日本人の特権ではないだろうか。昨今は新しい外国語を訳す際、何でもカタ仮名を当てはめるだけで言葉の意味は蔑ろにされている。何とも勿体無いことである。

さて、本節以降の地の文で、筆者は「フウイフツム」という表記を実際に使用してみた。だが、慣れないせいもあって、自分でも多少の違和感があることは認めざるを得ない。もし今後、自分がこの表記で通すことになった暁には、過去に執筆した『ガリヴァー』関係の論文の中で使用した「フウイヌム」という表記もすべて「フウイフツム」に訂正しなければならなくなるが、それはそれで面倒だ。過去は過去として認めねばならないとすれば、そのままにしておく方が良いだろう。むしろ、今後この「フウイフツム」という表記を実際に自分でも使うかどうかの方が問題だろう。しかし、これも未来のことなので、今ここで使用するかどうかについて断言することは差し控えておく。なぜなら、もっと良い表記が思い浮かばないとも限らないからだ。

さらなる問題としては、もしこの論文やその表題が CiNii などに掲載される場合、半角の「フツツ」の部分のを正しく表記してもらえるかという心配がある。PDF 掲載ならば問題はないだろうが、インターネットでの掲載方法によっては、筆者のせつかくの新案も正確に表示されない恐れがある。全角の中に半角を混ぜて「フウイフツム」とは入力されず、「フウイフンフンム」と全角のカタ仮名のみの表記をされてしまうかもしれない。どうか正しく「フウイフツム」と表記してもらえるようにと願いつつ筆を置くこととする。

参考文献

- Jonathan Swift. *Gulliver's Travels*. Ed. Paul Turner. Oxford: Oxford UP, 1971.
- . *Gulliver's Travels*. Ed. Claude Rawson. Oxford: Oxford UP, 1986; New edition 2005.
- . *Gulliver's Travels*. Ed. David Womersley. The Cambridge Edition of the Works of Jonathan Swift, Vol. 16. New York: Cambridge UP, 2012.
- 梅田昌志郎 訳『ガリバー旅行記』東京：旺文社（旺文社文庫）、1976年。
- 江上照彦訳編、スウィフト作『ガリバー旅行記』社会思想社（現代教養文庫）、1970年。
- 加藤光也 訳『ガリバー旅行記』東京：講談社（講談社青い鳥文庫）、1992年。
- 坂井晴彦 訳『ガリヴァー旅行記』東京：福音館書店（福音館文庫）、2006年。
- 柴田元幸 訳『ガリバー旅行記』東京：「朝日新聞」連載、2021-22年。
- 富山太佳夫 訳『ガリヴァー旅行記』東京：岩波書店〈ユートピア旅行記叢書 6〉、2002年。
- 中野好夫 訳『ガリヴァ旅行記』東京：新潮社（新潮文庫）、1951年。
- 『続ガリヴァー旅行記』東京：岩波書店（岩波少年文庫）、1951年。
- 原民喜『ガリバー旅行記』東京：主婦の友社、1951年。
- 『ガリバー旅行記』東京：講談社（講談社文芸文庫）、1995年。
- 平井正徳 訳『ガリヴァー旅行記』東京：岩波書店（岩波文庫）、1980年。
- 山田蘭 訳『ガリバー旅行記』東京：角川書店（角川文庫）、2011年。
- 阿刀田高『あなたの知らないガリバー旅行記』東京：新潮社、1985年。
- 小澤正人「“Vril”を読む：『来るべき種族』の翻訳を通して」『ことばの世界：愛知県立大学通訳翻訳研究所年報』第11号11-23頁、愛知県立大学 通訳翻訳研究所、2019年。
- 金田章裕「ガリバーからゴールドラッシュへ—英国の世界認識と世界覇権をめぐる—」紀平英作編『グローバル化時代の人文学 対話と寛容の知を求めて（上）連鎖する地域と文化』京都：京都大学学術出版会、2007年、250-280頁。
- 高山宏 訳、ルイス・キャロル著、マーティン・ガードナー注『新注 鏡の国の

アリス』東京：東京図書、1994年。

千森幹子『ガリヴァーとオリエント 日英図像と作品にみる東方幻想』東京：法政大学出版局、2018年。

鶴見俊輔他編『いのちの書』〈ちくま哲学の森 2〉東京：筑摩書房、1989年。

中野好夫『スウィフト考』東京：岩波書店（岩波新書）、1969年。

原田範行、服部典之、武田正明『『ガリヴァー旅行記』徹底注釈 [注釈篇]』東京：岩波書店、2013年。

原田範行『NHK カルチャーラジオ 文学の世界 風刺文学の白眉「ガリバー旅行記」とその時代』東京：NHK出版、2015年。

松菱多津男『邦訳「ガリヴァー旅行記」書誌目録』横浜：春風社、2011年。

柳瀬尚紀訳、ルイス・キャロル著『鏡の国のアリス』東京：筑摩書房（ちくま文庫）、1988年。

参考資料

国立国会図書館デジタルコレクション。<<https://dl.ndl.go.jp>>（2022年3月30日閲覧）

ジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift) 原民喜訳『ガリバー旅行記』(Gulliver's Travels) 青空文庫。
<https://www.aozora.gr.jp/cards/000912/files/4673_9768.html>（2022年3月30日閲覧）

戸川秋骨「夏目漱石氏の文学評論を読む」日本文学電子図書館。
<http://promeneur-libre.raindrop.jp/litterature/pdf_jp/Togawa_Shukotsu_Soseki-Bungakuhyoron.pdf>（2022年3月30日閲覧）

「ヒップなファッション、カルチャー、ライフスタイル WEB マガジン | HOUYHNHM (フイナム)」<<https://www.houyhnhm.jp>>（2022年3月30日閲覧）